

坂本直行著 『山・原野・牧場 ～ある牧場の生活～』

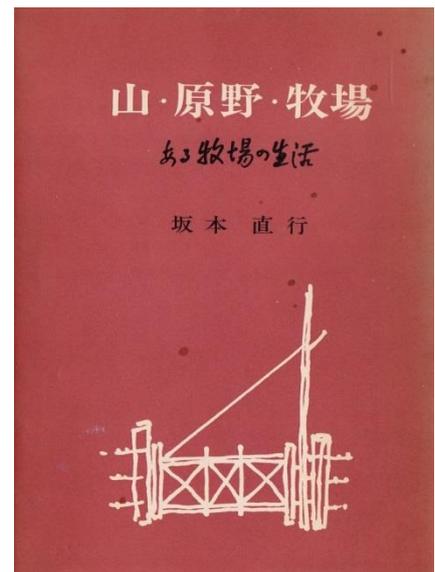
西日本の南国生まれにとっては、北の大地は憧れであった。草深い田舎の高校からも数年には1人くらいは北大に進学する生徒がいて羨ましいものだった。私は水呑み百姓の倅で、親には遠いところに遊学させる資力もなく、また私にも左様なアタマもなかった。学校の図書室にあった北海道原野の写真などで見果てぬ夢を見ていた。就職してからも、北海道支店に転勤できれば北海道の山にも登れるかと転勤願いなども出してはみたが、勝手な目論見を見破られたのか意に反して鹿児島に島流しにされたりした。「北帰行」や都はるみの♪着てはもらえぬセーターを涙こらえて編んでます・・・♪、石川さゆりの♪上野発の夜行列車降りた時から・・・♪などが世情持て囃されたのも「北」への憧憬のなせる業であろうか。

若い頃読み耽ったのが坂本直行、[更科源蔵](#)、[周はじめ](#)などの北海道の未開拓時代の“原野物”であった。北海道の山といえば伊藤秀五郎や板倉勝宣の本が大方が認める古典であるが、山には登らずとも馬を飼いつつ北の果ての原野で実際に苦勞して生活した彼らの筆には言い知れぬ味わいがある、今はもうすっかりどこかに消え失せてしまった私の“北への郷愁”を今でも撫るのである。いつだったか、たまたま神田の古本屋で半世紀近くぶりにこの本に再会した。

著者は北海道生まれ。山の方では日高山脈のルート開拓で名を残したそうだが、35年間にわたり十勝の未開原野で牛馬の放牧と開墾に従事、苦しい仕事の折々に牛のこと、馬のこと、牧場に現れるクマやキツネやイタチやフクロウなどのこと、北海道の自然と生活の営みのことなどを、何の銜いもなく自然体に描いたのがこの本である。処々に挿入されている素朴な挿画も楽しい。原野とそこに暮らす人間も含めた動植物に対するほのぼのとした思い遣りが伝わってくる。

ここに描かれた原野の風物は1世紀近くも前のことである。現在の北の大地は当時とは随分変わっているだろうから、若かりし頃見た「北」の幻影はこれらの本の中に閉じ込めておいた方がよいのかも知れない・・・。

茗溪堂 1975 年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)